

---

# 魔笛

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔笛

### 【Nコード】

N1070P

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

ひよんなことから魔法の笛を授けられパミーナ王女の救出に向かうことになったタミーノ王子。だがその先で試練を受けることになり。果たしてどうなるのか。モーツァルト最後の作品にして様々な議論が今尚為されている名作を小説にしました。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

## 第一幕その一

魔笛  
第一幕 魔笛を授けられ

森の中から一人の若者が出て来た。

見ればその服は濃い青と赤が複雑に入り混じった光を放つものだった。上着は日本の着物を思わせるものでズボンも何処かそんな感じである。

金髪で癖のある巻いた髪を上にあげている。青い目がかなり美しい。彫のある顔でその小さな目には知的な光もある。その若者が森の中から出て来て必死に逃げていた。

「助けてくれ！」

見れば後ろからとてつもない大きさの大蛇が彼に迫って来ている。

「このままでは蛇！」

だが気力が尽きたのか倒れ込んでしまった。蛇は今にも彼を飲み込まんとする。しかしここで三人の不思議な女達が出て来てである。それぞれの指から光を放ってその蛇を倒してしまった。

「そうはさせるものですか」

「この大蛇め！」

その光で大蛇を貫き仕留めてからの言葉だった。

「これでこの若者は救われたわ」

「私達の手によって」

「それに」

その若者を見ての言葉である。

「この若者って」

「そうね。綺麗な顔をしているわ」

「こんなに綺麗な若者って」

「まるで絵になっているようね」

三人はそれぞれ黒いドレスを着ている。一人は金髪で青い目をし

ていて一人が銀髪で緑の目、最後の一人は青銅の輝きの髪で黒い目をしている。

「こんな若者と一緒になれたら」

「それこそ」

「女王様も」

女王という言葉も出て来た。

「御心を安らげさせられるわ」

「きつとね」

「そうなるわね」

「それじゃあ」

ここでまた言い合う三人だった。

「私が残るわ」

金髪の美女が言うのだった。

「だから貴女達はね」

「何、それじゃあ」

「貴女だけが残るっていうの？」

「まさか」

「そうよ、まさかよ」

金髪の婦人は二人に話す。

「だからね」

「駄目よ、私よ」

「私かなのよ」

銀髪の美女と青銅色の髪の美女も主張する。

「ここに残るのは」

「私がこの若者の前によ」

「残るわ」

「そうするわ」

こう言い合いであった。三人共引かない。

「私が」

「いえ、私が残って」

「この若者を護るわ」

「蛇は倒したけれど」

「まだ何がいるのかわからないから」

言っていることは三人共同じであった。

「絶対によ。私が残るわ」

「この美しい若者のところに」

「だからその間に」

「埒が明かないわね」

ここで遂に銀髪の美女がたまりかねて言った。

「もうこうなつたらね」

「そうね。少しの間だし」

「ここは結界を張って」

「そうして」

三人はまた指を動かして光を放った。それによって彼の周りに結界を張った。それで守りを固めてであった。三人はその場を去るのだった。

「ではまた」

「会いましょう」

「すぐに戻るから」

こう話してその場を後にする。するとそれと入れ替わりに。

一人の若い男が出て来た。鳥の羽毛で作ったブラウンの服を着ている。帽子も鳥の頭の形であり非常に変わったものだ。黒い細めの多い毛が帽子の間から見える。目は黒く鼻が高い。やはり彫が深い。背はかなり高く身体つきはしっかりしている。その彼が来たのだ。

## 第一幕その二

彼の周りには鳥が舞っている。その鳥達を見ながら言うのだった。

「あれっ、ここは何処なんだ？」

周囲を見回しながらの言葉だった。

「森から出てみたら。それにこいつが死んでいる」

大蛇を見ての言葉だ。

「この化け物が何で死んだんだ？」

「あれ？」

そしてであった。ここでタミーノも意識を取り戻した。そこで男が言っていた。

「おいらは鳥刺し家業。いつも朗らかエッサッサ！」

こつ明るく言っていた。

「老いも若きも国中で知らぬ者なく鳥刺し屋。罾のことなら任せておくれ笛の吹きよりも生かす腕！」

「何か変わった男だな」

タミーノも彼を見て呟く。

「誰なんだろうか」

「鳥は全部おいらの獲物。捕まえて朗らかよい機嫌」

さらに言うてであった。

「娘絡める鳥網欲しければ一ダースすつごつそりと絡め取って傍に置きたければ籠の中」

こんなことを言うのだ。

「そして砂糖の山とつかえて。一番好きな娘に砂糖を全部やるう」  
朗らかな言葉がさらに続く。

「そして優しく口をつけ合って女房亭主のひとつがい。おいらの傍でおねんねすれば赤子の様に揺すってやるう」

「ねえ君」

タミーノはその彼に問うた。

「少しいいかな」  
「おや、何だい？」  
「君は誰なんだい？」  
立ち上がりながら彼に問うのだった。  
「はじめて見るけれど」  
「おいらが誰かか」  
「うん、誰なんだい？」  
その名前等を問い続ける。  
「それで」  
「またそれは馬鹿な質問だね」  
「馬鹿なだつて？」  
「そうだよ。見ればわかるじゃないか」  
笑つてこうタミーノに言うのである。  
「見ればね。それでね」  
「わかるつていうのかい？」  
「人間だよ」  
そしてこう言うのだった。  
「見ればわかるじゃないか」  
「人間なのか」  
「じゃあ他に何だつていうんだよ」  
また笑つての言葉だった。  
「人間だよ。あんたと同じね」  
「また変わった服だね」  
「いや、あんたもかなりね」  
それはお互い様だというのだ。それを言うのであった。  
「変わつてると思うがね」  
「そうかな。変わつてるかな」  
「そうじゃないか。変わつてるよ」  
彼はタミーノに笑いながら話し続ける。  
「随分とね」

「僕の国じゃこれが普通の服なんだけれどな」

「そうそう、おいらも聞きたいよ」

今度は彼からの言葉であった。

「あんたは一体何者なんだい？」

「僕かい」

「そうさ。あんたは一体何者なんだい、それで」

「僕はその国の王子なんだ」

「王子？」

「そう、東の彼方の国の」

そこから来たというのである。

「父は広い領土と多くの人民を治める国の主なんだよ」

「だから王子様なのかい」

「うん、東の方のね」

「東というと」

彼はタミーノのその言葉を聞いてそのうえで言うのであった。

「あれかい。あの山の向こうにも国があって人間があるのか」

「僕の方から見てもそうだったんだよ」

お互いに東の彼方に連なって見えるその山々を指差しながら話す。

「あの山の向こうに本当に人がいるのかをね」

「わからなかったのかい」

「その通りさ」

「そうか、それならだ」

彼はタミーノのこの話を聞いてあらためて述べた。



### 第一幕その三

「おいらも大儲けができるな」

「大儲けって？」

「いや、鳥を売ってね」

すっかり自分の話になっていた。

「それでね」

「君は商人なのかい？」

「さて」

そう問われるとだった。首を傾げさせるのだった。

「それはどうかな」

「どうかなって君はわからないのかい」

「いや、どうやって生まれてきたのか自分でもわからないんだよ」

「御両親も何もかい？」

「そう、何もだよ」

こう答えるのだった。

「わからないね」

「そうなのか」

「けれどそれがどうしたんだい？」

「いや、変わってるなって思ってたね」

こう素直に己の考えを述べるタミーノだった。

「この国の名前は」

「エジプトだよ」

それがこの国の名前だというのだ。

「丁度この国の入り口だね」

「そうか。エジプトというのか」

「あんたの国の名前は？」

「日本だよ」

その国から来たというのだ。

「そこから来たんだけれどね」

「日本ねえ」

「知ってるかい？」

「いや、悪いけれどね」

今度は彼が首を横に振った。

「聞いたことのない国だね」

「そうなんだ」

「森も山も越えた向こうにあるんだ」

それがかなり異様だというのだ。

「それはまた」

「まあ遠くではあるけれどね」

「少しだけ納得できたよ」

「それで君は？」

「またおいらのことかい」

「うん、そうだけれど」

こう彼に話すのだった。

「君はどうやって生きてるんだい」

「生きているか、かい」

「うん、どうやって」

「皆と同じだよ」

彼は素っ気無く答えた。

「皆とね」

「というと？」

「だからさ。飲んだり食ったりして」

「それじゃあ人間なのは間違いないんだね」

「そうさ。もの同ものを交換してね」

そうしてというのだ。

「星を煌かせた女王様とお付きの御婦人方においらが色々な鳥を捕  
つて差し上げる」

「それが君の糧になるんだね」

「その通りだよ。そうして食べ物と飲み物を貰ってるんだ」  
「成程」

「そういうことだよ」

「星を煌かせた女王か」

タミーノはその存在の名前を聞いて少し俯いて考える顔になった。

「その人に会ったことはあるのかい？」

「いや、おいらはそれはないね」

「ないのかい」

「凄く偉い人だからね。おいらなんか会うことはね」

「けれど君は女王を知っている」

「ああ、そうだよ」

そのことは認めるのだった。

「けれどそれがどうしたんだい？」

「いや、それだよ」

「それ？」

「君は伝説の夜の女王を知っている」

その存在は伝説だというのである。

「間違いなく」

「何かおかしいな」

彼はそんなタミーノの目を見て怪訝な顔になった。

## 第一幕その四

「いや、おいらをそんな目で見ても無駄だよ」

「無駄？」

「おいらは強いよ」

「一目で虚勢とわかるがこう言うのだった。」

「千人力だからね」

「千人力？」

「そうだよ。強いんだよ」

「それじゃあこの大蛇は君が」

「タミーノはそれだけの力があると聞いて述べるのだった。」

「倒したのかい？」

「あ、ああ。そうだよ」

「調子に乗ってでまかせを言う彼だった。」

「その通りさ」

「それは凄いね」

「そしてタミーノはその話を信じた。」

「いや、かなり」

「そうだろう？おいらは強いんだ」

「両手を誇らしげに掲げさせての言葉だ。」

「だからね」

「ちよつと待ちなさい」

「パパゲーノ」

「何を言っているのかしら」

「しかしここで。三人の美女達が出て来た。そうして彼の名前を呼んだのだ。」

「またそんなことを言って」

「おや、これはどうも」

「パパゲーノと呼ばれた彼はまずは彼女達に一礼した。」

「暫くぶりです」

「この人達は？」

「さっきお話した女王様の侍女の方々なんだよ」

「パパゲーノは気さくに笑ってタミーノに話した。」

「毎日おいらから鳥を手に入れてその代わりに葡萄酒とパンと甘いイチジクをくれるんだ」

「そうなのか」

「今日はです」

「葡萄酒はありません」

その三人の侍女達が厳しい声でパパゲーノに告げてきた。

「言っておくませんが」

「今日は水です」

「そしてパンではなく石です」

「それをあげましょう」

「えっ、石をですか!？」

それを聞いて思わず声をあげたパパゲーノだった。

「何で石なんですか?そして水って」

「それにイチジクの代わりにです」

「これをです」

こう言って彼の口に金の錠だった。早速それで喋れないようにしたのだった。

「フム!」

「何故こうしたのか」

「それは嘘の罰です」

「御前がこの大蛇を倒したなどと」

「よく言っただけです」

それへの罰だというのだ。

「他人の勇敢な行動を己の手柄にする」

「そんな罪は許されません」

「だからこそ」

あくまで厳しい彼女達だった。

「女王様からの御命令です」

「わかりましたね」

「フム！」

「そしてです」

「貴方ですが」

タミーノには一転してだった。優しい声をかけるのだった。

「この大蛇を倒したのは私達です」

「そして貴方にです」

「御願いがあるのですが」

「僕にですか？」

タミーノは侍女達の言葉に怪訝な顔で返した。

「それは一体」

「我等が姫を助けて頂きたいのです」

「パミーナ様を」

「女王様の御為にも」

「パミーナ女王」

タミーノも彼女が誰なのかすぐにわかった。

## 第一幕その五

「その夜の煌く女王の娘」

「その通りです」

「そしてこれがです」

「この方です」

そうして何処からか肖像画を出してきた。タミーノはその絵を見て一目で心を奪われた。そうしてそのうえで恍惚として言うのだ。た。

「この絵姿の心奪う美しさは見たことがない。この神々しい姿が僕の胸に新しい感動を呼び起こさせてくれる。この気持ちは名づけようがない」

はじめて沸き起こる感情であった。

「僕はここで炎の様に燃え盛るのを感じる。まさかこの感情が」

その名前は彼もわかっていた。

「恋なのか」

それではないかというのだ。

「そうか。これが恋なのか、この人を見つけ出して会えたら」  
そうすればどうなるか。

「僕は温かく清らかになれる。恍惚に満たされて熱い胸に抱き寄せ  
て。彼女は永遠に僕のものになるんだ」

「それでは美しい若者よ」

「いいですか？」

「それで」

侍女達はそれぞれ言うのだった。

「勇気と不屈の心で用意を整えるのです」

「女王様は貴方の言葉を全て聞きました」

「そしてです」

「そして？」

「貴方を知りました」

「ですから」

タミーノに優しい言葉で述べていく。

「勇気と雄雄しさも持っているならば」

「優しさだけでなく」

「王女様を救われるだろうというのです」

「僕が彼女を」

「そうです」

まさにその通りだというのだ。

「ですから今こそ」

「あの悪人の手から姫を」

「悪人!？」

タミーノはその悪人という言葉に反応した。

「それは一体誰なんですか？」

「恐ろしい悪人です」

「それが王女様をです」

「さらったのです」

「姫をさらったというのか」

それを聞いたタミーノはいよいよ真剣な顔になった。

「それなら僕がです」

「救われるというのですね」

「姫を」

「勿論です」

右手を強く握り締めての言葉だった。

「その為にも是非」

「お待ち下さい、今です」

「女王様が来られました」

「夜の女王様が」

そしてだった。今黒い服に星の瞬きをちりばめた小柄な女が中空に出て来た。星の輝きは様々な色でまさに夜である。



細く流麗な顔をしている。灰色の目は大きくはつきりとした二重で黒い流れる様な髪である。その髪に黒いやはり星の瞬きのある冠を被っている。

その女王が現われてだ。パミーノに対して優しく言うのである。

「若者よ、恐れることはないのです」

「あれがなのですね」

「はい」

「夜の女王様です」

「我等が主です」

侍女達はかしずきながらタミーノに答えた。タミーノは呆然と立って見上げておりパパゲーノは錠に苦しみ続けている。

「あの方こそ」

「そうなのですか」

「フム！」

「御身は穢れなく賢く謙虚です」

タミーノに声を送り続ける。

「貴方こそが深い悲しみに沈む母親の心を最もよく慰めることができます」

「僕こそが」

「娘がいなくなった為に私は悲しみに包まれています」

その声は悲しいものだった。

「娘がいなくなり全ての幸福が失われました」

「全てがなのですね」

「そうです。あの悪人が」

声には悲しさそのものがあつた。

## 第一幕その六

「今もそれがありありと目に浮かびます。その時のあの娘の姿が。恐怖のおののきと儂い抵抗と共にあの娘が連れ去られるのを」

「何ということ」

「ですから」

さらに言うのだった。

「娘の嘆願も私の役には立ちませんでした。ですが貴方は」

「僕が」

「それを救ってください。ですからどうか」

こう言ってそれで静かに夜の中に消えるのだった。そして残ったタミーノは。

「僕が見たものは」

「どうしたのですか？」

「一体」

「現実なのか」

女王がそれまで浮かんできたところを見上げながらの言葉だった。

「それとも五感が僕を欺いたのか」

「いえ、どちらでもありません」

「それは」

「では本当に」

「フム！」

ここでまた叫ぶパパゲーノだった。やはり喋れない。

「フム！」

「可哀想だけれどね」

タミーノは彼にはそのまま同情した。

「しかし僕には」

「パパゲーノ」

「それももう終わりです」

しかしここで侍女達が彼のところに来て言うのだった。

「女王様が許して下さいました」

「ですからこれで」

「喋りなさい、好きなだけ」

「やっとか」

口の錠を外されてやっとなんとするのだった。

「喋れるんだな」

「けれど嘘は駄目よ」

「いいわね、それは」

「わかったわね」

「ええ、よくわかりましたよ」

もう懲り懲りといった顔だった。

「これでよくね」

「ではこの錠を戒めに」

「そうします、本当に」

「嘔吐き共の口を」

侍女達はさらに言うのだった。

「全てこうして防いだらその時は」

「憎悪と中傷、腹立ちが全て」

「愛と友情に変わるでしょう」

「そしてです」

あらためてタミーノに顔を向けてあるものを出してきたのだった。

「これをです」

「どうか貴方に」

「お受け下さい」

「それは」

見ればそれは一本の笛だった。横笛で少し曲がっている。黄金の輝きが神々しい。

「貴方が危機に陥った時にはです」

「この魔笛が貴方を救ってくれます」

「ですから」

「この笛が僕を」

「そうです」

まさにその通りだというのだ。

「この魔笛があればどんなことでもできます」

「まさに全てのことがです」

「人の気質さえ変えられ」

その言葉が続く。

「悲しみを晴れやかにさせ愛を知らない者もその虜をします」

「それだけのものがあるのですか、この笛には」

「そうです」

「その通りです」

まさにそうだというのだ。

「この笛にはそれだけの力があります」

「黄金や王冠よりも尊く」

「人を変えることができます」

「成程」

「それでなのですが」

ここでまた言うのはパパゲーノだった。

## 第一幕その七

「おいらはもうこれで」

「いえ、貴方もです」

「そういうわけにはいきません」

「女王様は仰いました」

「えっ!?!」

それを聞いて啞然とするパパゲーノだった。

「それはどういふことですか?」

「ですから今言っただけです」

「その通りです」

「貴方もあの悪人ザラストロの寺院に」

「ちよつと、冗談じゃないですよ」

パパゲーノはそれを聞いて咄嗟に怯えた声をあげた。

「何でおいらがそんな」

「嫌だというのね」

「勿論ですよ」

有無を言わさぬ口調だった。

「ザラストロっていうのは悪い奴ですよね」

「ええ、そうよ」

「その通りよ」

「そんなのは」

全く以てというのだ。

「死にたくないですから」

「それで嫌だというのね」

「その通りです」

かなりムキになってさえいる。

「王子がいるのに?」

「タミーノ王子が魔笛を持っているというのに」

「それでもですよ」

あくまで行こうとしない。

「何でそんなおっかない奴のところ」

「それでは仕方ないですね」

「そこまで言うのなら」

「じゃあそういうことで」

「これをあげましょう」

「貴方に」

侍女達はこう言っているものを出してきた。それは。

銀の鐘だった。細い銀色の台の上に同じく銀色の棒が木の様にありそこに無数の小さな鐘がそれこそ枝の葉の如くある。それだった。

「どうぞ」

「これをあげましょう」

「鐘をですか」

「そうです。その鐘が貴方を守ってくれます」

「その音が鳴れば何があってもです」

「貴方を守ってくれます」

「そうですか。だったら」

それを言われてやっと納得する彼だった。

「行ってもいいですけどね」

「じゃあそういうことで」

「宜しいですね」

「これで」

こんな話をしてやっと行く気になるパパゲーノだった。

そしてだタミーノは今度は侍女達にあることを聞くのだった。

「それでなのですか」

「それで？」

「どうしたのですか？今度は」

「まだ何か」

「その寺院ですが」

彼が問うのはそれだった。

「一体何処にあるんですか？」

「ザラスト口の寺院ですか」

「そこですね」

「はい、そこは何処に」

場所をであった。どうしても聞きたいのだった。

「それについても心配は無用です」

「ほら、見なさい」

「彼等を」

白い眩い服を着た三人の少年達が出て来た。三人とも赤い目をし  
ていて純粋な金髪である。その彼等が出て来たのである。

「彼等が導いてくれます」

「ですから何の不安もなく」

「行きましたよ」

「わかりました」

タミーノは彼等を見てようやく頷いた。

## 第一幕その八

「それなら」

「では今から御願ひします」

「いざザラストロの寺院へ」

「向かつて下さい」

「貴方もですよ」

パパゲーノに釘を刺すことを忘れない。

「宜しいですね」

「では今から」

「向かいなさい」

「わかりましたよ」

パパゲーノはかなり渋々ではある。

「じゃあそういうことで」

「では頼みましたよ」

「これで」

こうしてだった。彼等は少年達に導かれザラストロの寺院に向かう。今その寺院では黒髪に青い服の美少女が黒い肌に白い上着と褐色の男に追われていた。

「まだなのかよ」

「まだも何もないわ」

黒髪を清らかに長く伸ばし白く綺麗な肌をしている。紅の見事な唇に灰色の目である。その彼女が必死に黒人から逃げているのである。

「私は貴方とは」

「俺は嫌なのかよ」

「そうよ、嫌よ」

こう言つてであった。

「私は貴方は」



「なあパミーナちゃんよ」

この美少女こそがパミーナだというのだ。

「逃げてても無駄なんだぜ」

「無駄？」

「そうだぜ」

黒人は少し下卑た笑いを浮かべながらまた言い寄る。

「ここはザラストロ様の領土なんだぜ」

「それがどうかしたというの？」

「それがしたんだよ」

こう言うのだ。

「あんたは何があってもここから逃げられないんだよ」

「いえ、私はそれでも」

「強情な娘だな」

「私は一人の方しか愛しません」

あくまでこう言うのだった。

「何があっても」

「やれやれ。じゃあ捕まえて」

黒人が言うのだった。不意に周りから彼と同じ格好の者達が出て

来た。肌の色は様々である。

「どうしたんだモノスタトス」

「パミーナさんを追っかけてるのか」

「またか」

「無駄だよ、もう」

「無駄なんじゃないんだよ」

黒人は名前を呼ばれた。そうして口を尖らせて彼等に反論するの

だった。

「それがな」

「やれやれ、諦めの悪い奴だ」

「全くだ」

「どうしたものだか」

「俺だつてな。恋人が欲しいだよ」

彼は今度は眉を顰めさせている。

「だからだよ。何があつてもな」

「それで俺達をか」

「呼んだのか」

「そつだよ。頼めるか？」

「だから無駄だよ」

「諦める」

友人達の言葉はきついものだった。

「いい加減な」

「もうな」

「諦めるものか」

しかし彼も強情である。

「俺も恋人が」

「何だここは」

そこにパペーノがふらりと来たのだった。辺りをきよろきよろと見回している。だがそこは彼の全く知らない場所だった。遠くにピラミッドやスフィンクスが見える。それも彼がはじめて見るものだった。

「おかしな場所だな。それに誰かいるし。おおい」

「んっ、何だあいつは」

「化け物か!？」

「な、何だあいつは!」

モノスタトス達もパペーノもだった。お互いを見て心臓を口から出さんばかりに驚いた。

## 第一幕その九

「鳥の化け物か！」

「肌が真っ黒だ！」

「怪物だ！」

「悪魔だ！」

「逃げろ！」

モノスタトス達は一目散に逃げ去った。後に残ったのはパミーナとパパゲーノだけだった。パミーナはとりあえず助かったことは自覚した。

「助かったのね、私は」

「恐ろしい奴だったな」

「パパゲーノはまだ驚いていた。」

「あんな姿形の人間のかな、それは」

「あの」

「いや、まだ信じられない」

「まだパミーナには気付いていない。」

「あんなのがいるなんて」

「あのですね」

「あっ！？ああ」

ここでやっと彼女に気付いた。それで顔を向けた。

「何かえらく可愛い娘だな」

「どなたですか？一体」

「おいらはパパゲーノっていうけれど」

「パパゲーノさんですか」

「あんたは一体？」

「パミーナです」

彼女はそのまま名乗った。

「お母様は夜の女王ですけれど」

「そうか、じゃああんただったんですね」  
「私だった？」  
「はい、おいらはその使いです」  
一応恭しく一礼はした。  
「女王様の」  
「それじゃあ私を助けに来てくれたの？」  
「はい、そうなります」  
「有り難う……」  
パミーナはそれを聞いてまずはほっと胸を撫で下ろした。  
「これで」  
「はい。それじゃあ今から逃げましょう」  
「ちよっと待って」  
だがここでパミーナはパパゲーノに問うのだった。  
「貴方の名前は？」  
「おいらのですか」  
「ええ。その名前は何というの？」  
「こう問うのだった。」  
「貴方の名前は」  
「パパゲーノといます」  
「パパゲーノ？聞いたことはあるけれど」  
「ああ、おいらのこと御存知だったんですか」  
「聞いたことはあるわ」  
「それはあるというのだ。」  
「けれど会ったのははじめてね」  
「そうですね。おいらもお姫様に御会いしたのははじめてです」  
「そうですね。本当に」  
「それでなんですけれど」  
「ここでさらに話してきたパパゲーノだった。」  
「とにかくここから逃げましょう」  
「ええ、そうですね」

「それにしても」

「パパーノはここでパミーナの肖像画を出してきた。パミーナはそれを見て。」

「これは私だわ」

「はい、そのままですよね」

「何故その肖像画が？」

「話せば長くなりますけれどいいですか？」

「パパーノは一旦こう断った。」

「そもそも私がここに来た理由はです」

「ええ。どうなのかしら」

「おいらは今日も捕まえた鳥をお納めに侍女の方々のところに行きました」

「三人の侍女達のね」

「はい、そしてそこである方に御会いました」

「話すことは正直だった。実は錠のことで懲りていたのだ。」

「日本から来た王子様で」

「日本？あの東の果てにあるっていう？」

「ああ、そういえばそう仰ってました」

「パパーノはこのことも思い出した。」

## 第一幕その十

「何かそこから来られたて」

「それでその日本の王子が」

「この肖像画を見て貴女を救われようと決意されたのです」

「私の肖像画を見てなのね」

「はい」

まさにその通りだというのだ。

「その通りです」

「それじゃあ」

パミーナはその話を聞いてだ。あることに気付いた。それは。

「その方は私を愛して下さっているのかしら」

「はい、それは間違いありません」

これはパパゲーノも傍で見て知っていた。

「ですからここからすぐに出て」

「わかったわ。それじゃあ」

「それにしても」

ここでパパゲーノはふと思ったのだった。

「タミーノ様にはパミーナ様ができて」

「どうしたの？」

「パパゲーノには。パパゲーナかな」

名前が自然に出て来た。

「彼女がいなくなあ」

「貴方はまだ一人なの」

「ずっと一人ですよ」

生まれた時も親もわからないからそれは当然だった。

「もうずっとね」

「そうだったの」

「ええ。困ったことに」

「相手はすぐに見つかるわ」

パミーナは優しく少し落ち込んだパパゲーノに話した。

「だからね。気を取り直して」

「だといいですけれど」

「恋を知る程の男の人は善良な心を持っているわ」

「甘い衝動と一緒に味わうのが女の人の第一の勤めですかね」

「そうよ」

まさにそうだと答えるパミーナだった。

「だからね。貴方もそうした相手とね」

「一緒にですか」

「そうよ、一緒にね」

こうパパゲーノに話すのだった。

「恋はあらゆる苦痛を鎮めて命あるものは誰もが恋にその身を捧げるのよ」「ですな。恋は」

パパゲーノはさらに言った。

「日々の生活に味をつけてこの世を滑らかに動かしてくれます」

「恋を喜びそれによってのみ生きる」

「そうしていくと」

「ええ。夫婦であることで人は神々しさに達するのだから」

「じゃあおいらも」

ここまで聞いてパパゲーノは遂に気を取り戻した。顔に陽気さが戻っている。

「相手を見つけます」

「ええ、それじゃあ今は」

「ここを」

「去りましょう」

「こう言つて去るのであった。そしてこの頃タミーノは。

「さあ王子」

「もつすぐです」

「間も無いです」

三人の少年達が彼を導いていた。  
「この道を行けばもうすぐ辿り着きます」  
「そして男らしく戦って下さい」  
「その為にです」  
「僕達はです」  
こつ彼に声をかけて導くのだった。  
「教えに従い毅然としてです」  
「耐え忍び」  
「沈黙を守っているのです」  
「優しい少年達よ」  
タミーノはその彼等に問うのだった。  
「僕はパミーナを救えるだろうか」  
「それは何とも申し上げられません」  
「言えないのか」  
「はい、まだ」  
「それは」  
できないというのだ。  
「毅然として耐え忍び」  
「沈黙を守るのです」  
「まずはそこからだというのだ。」  
「心掛けるのは男らしく振舞うことです」  
「男らしく?」  
「振舞うのです」  
「そうすればです」  
少年達は口々に彼に話していく。  
「雄々しい勝利を得られるでしょう」  
「そうか」  
タミーノはその言葉を受けて確かな顔で頷いたのだった。



## 第一幕その十一

「それなら僕は。しかし」

ここで門が出て来た。そのの左右にある円柱にはこの場所には智恵と労働と芸術があると書いてあった。厳粛な文字によつて。

「ここは神々のいる場所なのだろうか」

その門を見たタミーノの言葉だ。少年達は何時の間にか消えていく。

煉瓦の門が見える。その奥には峻厳な寺院が見える。城にも見えない。

そしてだ。タミーノはそうしたものを見てさらに話すのだった。

「行動が玉座につき怠惰が追い払われる場所では悪徳も容易く権力を握れない」

「そうだというのだ。」

「勇気を出して門に入ろう。僕の意図は高潔でやましいところのない純潔なものだ」

「自信はあつたのだ。」

「怯えてはいけない、パミーナを救い出すんだ」

「待て」

しかしだった。ここで門から声がしてきた。

「待つのだ」

「待て？」

「そうだ、待て」

「一体誰が待てというんだ？」

「そのの若者よ」

ここで、だった。黒い法衣を着た男が出て来た。かなり背が高い。

「ここで何をするつもりなのだ？」

「愛と特性の所有権を主張したいのです」

「ふむ。それは」

その僧侶はそれを聞いてまずは頷いた。  
「立派な志だ」  
「有り難うございます」  
「しかしその二つをどうして見つけられるのか」  
「どうして？」  
「そう、どの様にして」  
「見つけるのかと。彼に問うのだった。」  
「見つけられるのだ」  
「見つけるとは」  
「貴殿を導いているのはその二つではないな」  
僧侶は彼に言った。  
「死と復讐に導かれているのではないのか？」  
「悪人に報いるのは復讐あるのみです」  
「パミーノはこう主張するのだった。」  
「ですから」  
「そうした者はここにはいないが」  
「いない？」  
「女好きの困った者はいてもだ」  
「そうした輩はいてもというのだ。」  
「そこまで荒んだ者はいないのだ」  
「ですがここは」  
「ここは？」  
「ザラストロが治めているのですよね」  
「このことを問うのだった。」  
「確か」  
「如何にも」  
「そのことは僧侶も認めた。」  
「ここはザラストロ様が治めておられる」  
「しかしここは」  
「叡智の神殿だ」

まさにそうだというのだった。

「この叡智の神殿で治めておられるのだ」

「それでは偽善だ」

タミーノは憤慨して言った。

「ここは」

「何故偽善だと？」

「そうではありませんか？ザラストロがここに住んでいるのですか  
ら」

「落ち着くのだ」

しかしここで僧侶は彼に言った。

「もう少し落ち着いて考えるのだ」

「それは何故ですか？」

「貴殿は虚偽の中にある」

「嘘だ、それこそが嘘だ」

タミーノは僧侶のその言葉を真剣な顔で否定した。

「僕はそれは」

「ザラストロ様を憎んでいるのか」

「倒さなくてはいけない相手です」

夜の女王に言われた言葉をそのまま言っていた。

「何があるうとも」

「誰に言われたかはわかる」

僧侶はそれは察していた。そのうえでの言葉だった。

## 第一幕その十二

「あの方だな」

「まさか夜の女王を御存知なのですか？」

「御存知も何もザラスト口様の奥方だった」

「嘘だ、それは」

「嘘ではない」

タミーノを見据えて毅然と述べた。

「それはだ。嘘ではない」

「それではパミーナは」

「パミーナ様がお生まれになって喧嘩をされてだ」

「別れたのですか」

「我等は昼の世界にいる」

それが自分達の世界だというのだ。

「しかしあの方は夜の世界を治めておられる」

「昼と夜が」

「そう、昼と夜だ」

その二つの世界の対立であるというのである。

「パミーナ様は今まで夜の世界におられた」

「母親の場所だから当然なのではないのですか？」

「それは違う。世界は昼と夜からなる」

「そうだというのだ。」

「夜の世界だけにいてはならないのだ」

「昼の世界にもですか」

「左様、いなくてはならない」

僧侶はこっちはつきりと述べた。

「だからだ」

「ではタミーノは」

「お父上のところにおられるのだ」

「しかしそれは」

「まずは待て」

タミーノへの確かな言葉だった。

「友情の手が貴殿を導きこの聖域に永遠の絆で結びつける刹那に」

「刹那に？」

「貴殿も昼の世界を知るのだ」

僧侶はこうも彼に告げた。

「わかつたな」

「一体何が」

「若者よ」

ここで寺院の中から声がしてきた。

「もうすぐに、さもなければ決して？」

「さもなければ、決して!？」

タミーノはそれを聞いて眉を顰めさせた。

「そしてパミーナは」

「あの方はまだ生きている」

「それは間違いない」

「そうか、それなら」

タミーノはそれを聞いてだった。意気を取り戻して述べた。

「全能の神々よ、御身等を讃えて一つ一つの音に僕の感謝を表せられれば」

言いながらその笛を吹いた。

「今ここに湧き出るままに御前の魔法の調べは何と力強いのか」

「その魔笛もまた」

「貴方を導いてくれるもの」

「優しい魔笛よ」

タミーノは声の中で言う。

「御前が鳴り響くと」

ここで何処からか獣達が出て来た。ライオンや豹もいれば象にキリン、そしてゴリラと様々な動物達である。その彼等がだ。

彼等はタミーノを囲んで踊りだす。彼はその獣達を見てさらに言うのだった。

「獣達でさえ喜びを感じる。けれどパミーナはまだ見ぬ彼女への想いだった。」

「この笛を聴いて欲しい。君は何処にいるのだろう。」

するとここであった。パパゲーノの笛の音を聴いたのだ。

「おや、あれは」

それに気付いてであった。

「パパゲーノの笛の音。しかも明るい」

そこまで聴き取っていた。明るく踊る獣達の中で。

「パミーナに会ったのかな。だとすれば」

そこに向かうのだった。そしてその二人は。

「早く会いましょう」

「そのタミーノ王子とね」

「はい、そうです」

まさにその通りだとパミーナに答えるパパゲーノだった。二人でとにかく逃げている。

## 第一幕その十三

「素早い足取りとです」

「臨機応変の勇氣と」

「敵の企みと憤怒から護り」

そう話して行くのだった。そうして。

魔笛の音を聴いたのだ。ここで二人は顔を見合わせる。

「あの音です」

「そうなのね」

「はい、あれです」

まさにそれだというのだ。

「タミーノ様が来られています」

「じゃあそこに行つて」

「はい、行きましょう」

こう話してだった。二人はさらに急ぐ。しかしその後ろにモノスタトスとその仲間達が来たのだった。

「やい待て！」

「逃がさないぞ！」

「うわっ、もう来た」

「困ったわ」

二人は彼等の方を振り向いて苦境の中にある顔になった。

「もう来たなんて」

「一体どうすれば」

「お仕置きだ」

モノスタトスは高らかに言う。

「悪い奴にはお行儀を教えてやる」

「そんなことができるものか」

「何としてもここは」

「逃がすか！」

言いながら捕まえようとしてきた。しかしであった。

「そうだ、ここで」

「どうするの？」

「これです」

今度はあの鐘を出してきたのだ。それをパミーナに見せて話すのだ。

「これを使つてです」

「これを使つてなのね」

「はい、やってみれば大当たりだつてあります」

この辺りは適当な彼らしい言葉だつた。

「さあ、それじゃあ美しいグロッケンシュピールよ」

「グロッケンシュピールを」

「御前の小鈴を鳴らすんだ。奴等の耳が歌いだす程」

そうして鐘を鳴らすとだつた。すると。

「！？この鐘の音は」

「この音は何と」

「何と素敵で綺麗なんだ」

「聴いたことなんて今までなかった」

モノスタトスと仲間達は言いながら自然と踊りだしてしまつた。

「何て綺麗な」

「心の正しい人が皆」

「この鐘を持つていたら」

パパゲーノとパミーナは怒りと憎しみを忘れ踊りだした彼等を見て言つのだつた。

「敵は苦もなく消え失せて」

「敵のない世を最上の調和のうちにもたらすだろう」

「手を取り合つた友情だけがこの世の苦勞を和らげる」

「いたわりを抜きにしてこの世に幸福は有り得ない」

そう言い合つてしているとだつた。ここで。

「ザラスト口様万歳！」



「ザラストロ様万歳！」

何処からか誰かを讃える声がしてきた。

「あれっ、この声は」

「ザラストロ？」

「逃げよう」

「けれど何処に」

「おいらが鼠だったらどんなに隠れたがることだろう。蝸牛みたいに小さかったら家の中に隠れるところだ」

言いながら何とか隠れる場所を探すが何処にもない。

「けれどないな」

「こうなったら正直に言いましょう」

パミーナが言うのはこのことだった。

「例えそれが罪になっても」

「そうしろというんですね」

「嘘はいけないわ」

だからだというのだった。

## 第一幕その十四

「わかったわね」

「ええ、じゃあ覚悟を決めて」

「あの方こそは昼を治める方」

「世界の半分を治められる方」

「まさに」

讚える声がさらに高まる。そして黄金の法衣を着た男が現われた。その手には太陽を表す杖がある。その彼が今やって来たのだ。

「パミーナか」

「はい」

彼は二人の前に来た。厳かな声で告げるのだった。

そしてパミーナもそれに応えてだ。こくりと頷いた。

「その通りです」

「何故ここにいるのだ？」

「ザラストロ様、私は罪を犯しました」

こう言うのである。

「貴方の世界から逃げようと思いました。ですがそれは私のせいでは  
ありません」

「そなたのせいではないというのか」

「はい、モノスタトスが私に迫り」

正直に話し続ける。

「それから逃れてのことだったのです」

「わかった」

ザラストロはそれを聞いて静かに頷いた。

「モノスタトスはまたやったのだな」

「その通りです」

「そなたは今別の者を愛しているな」

ザラストロはパミーナにこうも言った。

「そうだな」  
「おわかりなのですか」  
「そなたの目を見ればわかる」  
その大柄な身体から小柄な彼女を見ての言葉である。  
「その熱い目をだ」  
「私の目から」  
「愛は自由だ」  
ザラストロはそれは言う。  
「しかしそなたはまだ自由を手に入れるべきではない」  
「お母様のところへは」  
「言おう。私はそなたの父だ」  
「えっ!?!」  
「これは知らなかったのか」  
それを聞いての言葉だ。  
「何も聞かされてはいないのか」  
「お母様は何も」  
「かつては私の妻だった」  
「このことも話すのだった。」  
「しかし今は。昼と夜は別れたままだ」  
「そうだったのですか」  
「左様だ。そして」  
「そして？」  
「一つに戻らなくてはならないものでもある」  
「一つに」  
「それもやがて行く」  
彼は言った。  
「だが。今はだ」  
「今は」  
「そなた達の方が先だ」  
「やい、こっちに来るんだ」

ここでまたモノスタトスの声がしてきた。

「全く。手を焼かせてくれる」

「くっ、ここまで来て捕らえられるとは」

「あれはまさか」

「はい、そうです」

ここでそれまで青くなっていたパパゲーノがパミーナに話した。

「あの方がです」

「タミーノ王子なのね」

「その通りです」

「あの人は」

そしてタミーノも気付いたのだった。後ろ手に縛られている中で。

「ようやく出会えた」

「本当に来てくれるなんて」

「縄を解いてやるのだ」

ここでザラストロが命じた。

「よいな」

「はい、わかりました」

「それでは」

周りの者がすぐに動いた。そのうえでタミーノの縄を解いた。するとそれで彼は自由になりだった。パミーナと強く抱き合うのだった。

## 第一幕その十五

「ようやく出会えたんだね」

「まさか本当に出会えるなんて」

「夢みたいだ」

「全くだ」

「おい、待つんだ」

モノスタトスがそれを見て口を尖らせて抗議する。

「すぐに離れるんだ、何をしている」

「待て」

しかしであつた。ここでザラスト口はモノスタトスを咎めて言うのであつた。

「御前はまたやったのだな」

「うっ、それは」

「御前はパミーナとは駄目だ」

こう言うのである。

「それなのにまた言い寄るとは」

「それは」

「今度は懲らしめる必要がある」

そしてだつた。また周りの者に告げるのだった。

「踵の鞭打ちを」

「はい」

「わかりました」

「七十七回だ」

回数も命じた。

「いいな」

「待つて下さい」

「何だ？」

「それはあまりにも」

「何度も咎めた筈だ」

怒った顔でモノスタトスに告げていた。

「そうだな」

「それはそうですが」

「では大人しく罰を受けるのだ」

「しかしですね」

「言い訳は止めておくのだ」

それは許さなかった。

「わかったな」

「うう……」

「それではだ」

ザラストロは周りに命じた。

「この者の踵に鞭打ちを」

「わかりました」

「では」

「そしてだ」

そのうえでだった。己の前にいるタミーノとパパゲーノを見てそのうえで言うのであった。

「この二人はだ」

「この者は知っています」

一人がパパゲーノを指差しながらザラストロに話した。

「パパゲーノという鳥刺しです」

「鳥を捕まえてそれとものを交換しているな」

「はい、そういう男です」

「成程な。妻の国の者だろうか」

「ええ、そうですけれど」

パパゲーノもそれを認めて答える。

「それが何か」

「ふむ、わかった」

パパゲーノについてはそれでわかったとした。

「そしてこちらの者は日本からの客人か」

「わかるというのか」

「そうだ、服でわかる」

それによってというのだ。こうタミーノに話した上でさらに言うのだった。

「この二人は試練の殿堂に案内しよう」

「試練の殿堂!？」

「そして身体を清めるのだ」

「こつも話すのだった。」

「まずはだ」

「若しも美德と正義が偉大な人間の道に誉れを振り撒くなら」

「この地上は天国となり」

「人は神々の如くなるでしょう」

「では君達はだ」

ザラストロはあらためてタミーノ達に話した。

「いいな」

「何がどうなってるんですかね」

「わからない」

タミーノはパパーノの問いにもいぶかしむ顔で首を捻るばかりだった。

「これは」

「そうですね。何がどうなってるのか」

だが二人は沐浴の場に案内されていく。パミーナも女性達に何処かに案内されていく。話が一変したのは間違いのない状況だった。

## 第二幕その一

### 第二幕 試練を経て

ザラストロは厳粛な会議の場にいた。白い輝かんばかりの円卓の一席に座つてである。共に座す僧侶達に対して問うのであった。

「さて」

「はい、ザラストロ様」

「今日のことですか」

「そうだ。日本から来たあの若い王子だが」

「確かタミーノ王子でしたね」

「あの若者は」

「そう、名前はタミーノという」

ザラストロもその名前を認めた。

「先程話したがこの昼の世界に入りたいそうだ」

「夜の世界から昼の世界に」

「我等の世界にですね」

「人は光と闇の両方を知つてこそだ」

ザラストロはこんなことも言った。

「それならば我々はどうするべきか」

「その知ろつという徳高い若者を見守るべきです」

「友情を込めて手を差し伸べるべきです」

僧侶達は口々に言った。

「是非共です」

「そうしましょう」

「その通りだ」

まさにそうだと述べるザラストロだった。

「それではだ。いいな」

「はい、それでは」

「秘密は」



「口の堅い若者だ」

それも大丈夫だというのだ。

「そして慈悲深い」

「では問題ないかと」

「それで」

僧侶達は口々に述べた。

「ザラストロ様の仰る通りに」

「若者にはまず試練を」

「人はまずは偏見故にまずは過ちを犯してしまつ」

ここでザラストロは言うのだった。

「しかし知恵と良識がその誤ちを蜘蛛の巣の様に打ち砕き」

「そして光が」

「我等に」

「我等の支柱を二度と揺るがすことはない。だが偏見は去らなければならぬ」

「その通りです」

「それも」

僧侶達はザラストロの言葉に続く。

「タミーノが我等の奥義を完全に備えればそういったものはすぐに消え去る」

「すぐにですね」

「それも」

「そう、消え去る」

まさにそうなるというのだ。

「そしてだ」

「そして？」

「何なのですか？」

「その傍にあの徳高い乙女パミーナを」

「あの王女をですね」

「そう、神々はある若者に定められた」

そうだというのである。

「ではザラストロ様」

「うむ」

「彼にその試練を」

「そう考えている」

こう僧侶の一人に述べた。

「是非にだ」

「試練に耐えられるでしょうか」

「オシリスとイシス、そして神々が導いて下さる」

これがザラストロの返答だった。

「だからこそだ」

「心配は無用だと」

「そういうことですね」

「その通りだ」

まさにそうだというのだ。

「神々よ、新たな二人の若者に智恵の本義を与え給え」

「はい、あの二人に」

「是非」

僧侶達はザラストロの言葉に続く。

## 第二幕その二

「彷徨える彼等の歩みを導き危難の中で彼等を忍耐強く鍛え給え」

「その忍耐こそが」

「彼等を導く」

「そう。その試練の成果を彼等に見させ給え。されど彼等の命果つならば」

「その時は」

「一体」

僧侶達はザラストロにさらに問う。

「どうなるというのでしょうか」

「その時は」

「雄雄しく徳を求めし志を賞賛し彼等を御身等の住いに」

「こう言つてであつた。彼等を試練に導くことにしたのだ。」

そしてだ。タミーノとパパゲーノは寺院の中の一室にいた。そこで話をしていた。

「ねえパパゲーノ」

「何ですか？」

「僕達はどうなるのだろうか」

こう彼に問うのだった。二人はそれぞれベッドの上にいる。部屋の中は簡素でベッドの他は机とテーブルだけである。他には何もない。

「一体」

「あのザラストロって人は悪い人じゃないですね」

「そうだね。話がわからなくなってきたけれど」

「何かパミーナ様のお父上みたいですし」

「じゃあ夜の女王とは」

「夫婦つてことになりますね」

それはわかつたのだった。

「しかし。何なんでしょうね」

「わからないことだらけになってきたな」

「全くですよ」

「二人共」

ここで僧侶の一人が二人の部屋に入って来た。重厚な扉を開け  
かんだ。

「起きているか」

「はい」

「何ですか？」

「我等から何を探し何を求めているか」

二人にいきなり問うてきたのだ。

「それは何か」

「叡智と愛を求めて」

こう答えるタミーノだった。

「それだけです」

「その二つを命を賭けて手に入れられるか」

「入れられます」

答えるのはタミーノだけである。

「何があっても」

「命は惜しくないな」

「その為には」

「今なら引き返すことができる」

「ここでこんなことも言ってみせる僧侶だった。」

「それでもだな」

「智慧を手に入れることが勝利でパミーナが得られるものですから」

「愛がだな」

「はい」

「わかった」

そしてもう一人僧侶が入って来た。彼はパパゲーノに問うてきた。

「よいか」

「何なんですか？」

「そなたも試練を受けるか」

「滅相もない」

パパゲーノは首を必死に横に振ってそれを否定した。

「命を賭けるなんてとても」

「智恵はいらぬのか」

「智恵！？興味ありませんよ」

まさにその通りだというのだ。

「自然のままに寝ることと飲んで食べて楽しくやれば」

「それだけでいいのか」

「あとは可愛いお嫁さんでもいればね」

「いいのか、それだけで」

「そうですよ、いいですよ」

まさにそれでいいというパパゲーノだった。

「他には何もいりませんよ」

「それを手に入れたければ試練を受けるのだ」

「お嫁さんの為ですか」

「そうだ。受けるのだ」

「じゃあ命を賭けるんですか」

「その通りだ」

まさにそうだというのだ。

### 第二幕その三

「わかったか」

「それならおいらはずっと独身でいいです」

パパゲーノはまた首を横に振って言い返した。

「命あつてのものだねですから」

「では妻はいらぬのか」

「今申した通り独身で結構です」

「折角綺麗な年頃の娘が一人いるのにか」

僧侶はそれを聞いて述べた。

「それでもか」

「可愛いんですか」

「そうだ、可愛い」

それを認める。

「その通りだ」

「それで名前は」

「パパゲーナ」

その名前も語られる。

「それがその娘の名前なんですか」

「そうだ。わかったか」

「見られますか？その娘は」

「見たいか」

「見たいです」

身体を前に乗り出しての言葉だった。

「けれど見たら死なないといけないんですよね」

「見せてもいいがそれまで言葉を出してはいけない」

「言葉を」

「そうだ。そなたにそれができるか」

こうパパゲーノに問うのだった。

「それをだ」

「是非共」

そう言われるとであった。

「それで」

「王子よ、そなたもだ」

「パミーナを見てもですか」

「今は沈黙を守るのだ」

タミーノの方もそうした話になっていた。

「時には沈黙を守ること大事なのだ」

「だからこそ」

そしてここで二人の僧侶はタミーノとパパゲーノに話した。

「愛する相手を前にしても沈黙を守る」

「この試練は辛い」

「しかしだ」

「それに耐えられるものでなければならぬのだ」

そうだというのだ。

「わかったな。それではだ」

「試練をはじめ」

こうして二人は試練のピラミッドに案内された。夜の世界は星が瞬き白い三日月もある。ピラミッドはその白い月に黄色い姿を映し出していた。

二人はピラミッドの前に来た。しかしここに、であった。

「どうしてここにいるというの？」

「貴方達が」

「どうして」

三人の侍女がであった。彼女達が二人のところに来たのだ。

そして必死に二人に言うのであった。

「まさか試練を」

「受けるというの？」

「いや、それは」

「パパゲーノ」

タミーノはすぐにパパゲーノに言うてきた。

「今は」

「けれど何か」

「女王様も来ておられます」

「ここにです」

「えっ!？」

パパゲーノは侍女達の言葉にさらに心を揺れさせた。

「まさか」

「いえ、事実です」

その通りだというのである。

「その通りです」

「ですからここは」

「思い直すのです」

「さもないと」

そして次の言葉は。

「命はありませんよ」

「どうしても」

「夜の世界だけでは半分しかわかったことにはならない」  
「だがここでタミーノは一人呟いた。」



## 第二幕その四

「昼も知ってこそだ」

「昼の世界には何もないのです」

「夜の世界にこそ全てがあるのですよ」

しかし侍女達はこう言うのだった。

「ですからここは」

「私達の世界に戻るのです」

「どうします？」

「だから黙っているんだ」

パパゲーノはふらついているがタミーノは違っていた。

「いいね、何があっても」

「しかしですね」

「夜と昼を知ってこそ」

また言うタミーノだった。

「それこそだからね」

「けれどですね」

「さあ、どうするのです？」

「何故何も言わないのです？」

侍女達は苛立ちを感じながらまた二人に問うてきた。

「沈黙を守って」

「どういつつもりですか？」

「お話したいのはやまやまですが」

「だからパパゲーノ」

「弱々な」

パパゲーノとしてはであった。

「どうすればいいんだ」

「そうですね。昼に入って」

「死んでしまいたいというのですね」

「残念です」

侍女達も遂に諦めた。

「では私達はこれで」

「もう」

「夜の世界だけでは駄目なんだ」

また一人呟くタミーノだった。

「昼も知らなくては」

「どうなるんだろうな」

しかしパパゲーノはぼやくばかりだ。

「おいら達、これから」

彼は試練よりも大事なものが欲しかった。そしてタミーノは叡智を知ろうとしていた。しかし二人は今共にいるのだった。

そしてモノスタトスは。鞭打ちを受けた後一人外を歩いていた。

「やれやれだよ」

踵を庇いながらぼやくのだった。

「酷い目に遭ったよ」

自分のせいだとは思っていない。

「全く。しかし」

「ここで、であった。パミーナを見たのだった。」

「よし、また声をかけてみるか」

懲りずに向かいであった。楽しく歌う。

「誰だつて恋の喜びを感じるんだ、俺が恋をしたらいけないっていうのかい？そんな理屈はない筈だ。女の子なしの人生なんて何もない」

「これが彼の主張だった。」

「優しいお月様、いいですよね」

夜空を見上げて月に問う。その優しい光を見上げながら。

「白い娘を手に入れても。ですから」

こんなことを言いながらパミーナに近付く。しかしだった。

そこに夜の女王が来た。彼はそれを見てだった。

「おっと、これは」

ピラミッドの陰に隠れた。そうして隠れ見るのだった。

女王は宙に浮かび下にいるパミーナを怖い目で見据えていた。そのうえでだった。

「御前は何故ここに留まっているのです」

「お母様、それは」

「私が御前を助け出す為に向かわせたあの若者は？」

「試練に」

「ザラストロの試練に!？」

「はい」

まさにその通りだというのだ。

「その試練に」

「昼の世界の試練にと」

「それが駄目なのですか？」

「世界は夜によってのみ成り立つもの」

その夜の支配者の言葉だ。

「あの男は昼によってのみと言いました」

「ですがお父様は今」

「あの男のことは言ってはなりません」

女王はザラストロのことは決して聞こうとはしなかった。頑なに拒む。

## 第二幕その五

「私です」

「私は？」

「それはしません」

「こう言うのである。」

「そう、何があっても」

「何があってもなんて」

「昼と夜は決して一つにはなれないものです」

「これが彼女の考えであり今それを出したのである。」

「昼とは何があっても」

「しかしそれは」

「パミーナ」

女王の言葉はさらに厳しく険しいものになった。

「御前が若しここに留まるならば」

「どうなるのですか？」

「私は御前を護ることなぞできはしません」

それを厳粛に告げた。

「何があるうともです」

「何があるうとも」

「そう、何があるうとも」

「こう告げるのである、」

「昼の世界にいるならば決して」

「ですが昼の世界もまた」

その昼の世界を知った娘が知ろうとしない母に言うのだった。

「夜と同じだけ多くのものがあります」

「多くのものがと!？」

「お父様はすべての善良と悟性も知っておられます。悪人ではありません」

「言つてはならないと言つた筈です」

やはりザラストロに対しては感情を露わにさせる。

「決してです」

「ですが」

「昼の世界は夜を消そうとしている」

「それは思い込みでは」

「闇は光によつて消えるもの」

それはどうしてもというのだ。

「この世を光で覆おうとしているのです」

「闇ではなく夜なのです」

しかしパミーナは眉を困惑させた形にさせて母に話す。

「そして光ではなく昼です」

「同じものです」

「違います。昼と夜は互いに存在し合い世界を創るものです」

「言うことはもうありません」

言葉を遮つた。そのうえで娘にあるものを出してきた。それは。

「これは……」

「わかりますね」

「この短剣でお父様を」

「昼の世界なぞ不要です」

あくまでこう言うのだった。

「わかりましたね」

「ですが。私にはそれはとても」

「黙りなさい！」

こう叫んでであった。女王はその感情を遂に爆発させた。そのう

えでパミーナに告げた。

「地獄の復讐が私の胸の中で煮えたぎり死と欲望が私の中を巡り炎と燃える」

「そんな……」

「御前の手である男を殺さない限り、昼を遮らない限り御前は私の

娘ではありません」

「こう言うのだった。」

「永遠に勘当され見捨てられ親子の絆は一切絶たれます」

「お母様との……」

「御前の手でザラストロを殺さぬ限りは！復讐の神々よこの声を聞き給え！この私の誓いを！」

「こう叫び姿を消した。後には夜だけが残った。それは決して闇ではなかった。」

「どうすればいいというの？」

「パミーナは一人残され頂垂れていた。」

「私はどうすれば。お父様をだなんて」

「まあまあ」

「しかしであった。モノスタトスは頃合いを見て出て来てだ。にこやかに笑って言うのであった。」

「そんなに落ち込まないでいいじゃないか」

「貴方は」

「いや、逃げなくていいよ」

「そこから慌てて去ろうとするパミーナににこやかさを作ったの言葉だ。」

「何なら俺が力になるさ」

「私の方？」

「そう、だから」

「だから？」

「俺と付き合わないかい？」

「これが話の本題だった。」

## 第二幕その六

「その為にさ」

「私が貴方を」

「そうさ。どうだい？」

「それは何があってもできません」

一言で断るパミーナだった。

「何があっても」

「駄目だつてのかい？」

「はい」

あくまでそうだというのだ。

「私はタミーノに全てを捧げると誓いました」

「そんなのどうだつていいじゃないか」

「よくはありません」

あくまで引こうとしないパミーナだった。

「私は」

「そう言わなくてもさ。俺だつて」

「モノスタトスよ」

しかしであつた。ここでザラストロが来て。そのうえでパミーナの前に来て彼に言うのであつた。その顔は極めて厳しいものである。

「言つた筈だ」

「あのですね。俺だつて」

「ならん」

多くは言わせなかつた。

「わかるな。さもなければだ」

「わかりましたよ。俺は用無しつてことですね」

「娘にはもう相手が決まっている」

こう彼に言うのだ。

「だからだ」

「じゃあ俺はどうすれば」

「相応しい相手を探せ」

これがモノスタトスに告げる言葉だった。

「それでいいな」

「わかりましたよ。じゃあ」

モノスタトスもここで遂に諦めた。しかしであった。

去る中でだ。彼は呟くのだった。

「もう昼の世界には嫌気がさしたな。夜に入るか」

こう言って姿を消した。パミーナが泣きそうな顔で父に言う。

「お父様」

「あれが来ていたのだな」

「はい」

父の言葉にこくりと頷く。

「その通りです」

「困ったものだ」

それを聞いてまずは目を閉じて言うザラストロだった。

「それは」

「ですがお母様は」

「何もわかっていないのだ」

ザラストロは娘にこう告げた。

「だが」

「だが？」

「この神聖な神殿の中では人は復讐というものを知らない」

「復讐をですか」

「そうだ」

まさにそうだというのである。

「一人の人間が死んだならば」

「その時は」

「愛が彼を為すべき務めに導くのだ」

こう穏やかに娘に語るのだった。



「そして彼は友の手を取り」

「どうなるのですか？」

「満ち足り嬉々としてよりよい国に向かうのだ」

「そういう場所なのですね」

「その通りだ。人が人を愛する場所だ」

まさにそうだというのである。

「憎しみを感じることはないのだ。人は赦すもの」

「人を？」

「人は憎しみを超えなくてはならないのだ」

それはまさに高尚そのものの言葉だった。

「その様な教えを備えなくてはならないのだ」

「そうですね」

「あれにも。モノスタトスにも」

彼等のことを考えての言葉だった。

「それをわかってもらわなくてはな」

「それをなのですね」

「昼の世界もまた」

具体的にはその世界をだというのだ。

「わかってもらわなくてはな」

「では」

「行こう、我が娘よ」

優しく彼女に告げた。

「いいな」

「はい、それでは」

こうして二人である場所に向かった。そうしてタミーノとパパゲ  
ーノは僧侶達に案内されてまた別の試練の場所に入ったのであった。

## 第二幕その七

「ここだ」

「こんな場所ですか」

「こんな場所とは何だ」

パパゲーノの言葉にむっとした顔で返す僧侶だった。

「ここでは黙っているのだぞ」

「またですか」

「だから文句を言つな」

パパゲーノに対してあくまで言う。

「いいな」

「わかりましたよ。それじゃあ」

「わかつたら早く入れ」

こう言つて二人をそのまま部屋に入れる。そこはピラミッドの玄室の一つだ。タミーノとパパゲーノはこの部屋に二人だけとなった。

「タミーノさん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

パパゲーノの問いに言われた通り沈黙で返す。

「何て生活なんだ。おいらには自分の藁の家や森の方がいい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そこだと鳥の声がしょっちゅう聞こえる」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何も仰らないんですか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言で頷くだけのタミーノだった。

「面白くないなあ。水一滴もないし」

こんなことを言いながら玄室を出て廊下を歩いていく。そして空中庭園に出た。夜の中に緑の木々が見える。そこに入るとであった。

「パパゲーノ」

老婆の聲がしてきた。

「パパゲーノ」

「誰だい？おいらを呼ぶのは」

「私よ」

こう言つてその灰色のフードに全身を包んだ腰の曲がった老婆が  
出て来たのだ。

「私かなのよ」

「水はあるかい？」

「水？」

「ああ、あるかい？」

「ほら」

こう言つて水の入った皮袋を出してきたのだった。

「これをどうぞ」

「悪いね。しかし」

「しかし？」

「退屈だよ、ここは」

その試練が最初から嫌で嫌で仕方ないから言つのであった。二人  
は石のところに並んで座つてそのうえで話をするのであった。

「全くね」

「そうなの」

「それだけけれど」

ここであらためて彼女に問うのだった。

「あんたは誰なんだ？」

「私かい？」

「名前は何ていうんだい？」

「パパゲーナっていうんだよ」

こう皺がれた声で答えるのだった。

「それが私の名前だよ」

「何だ、おいらと同じ名前だな」

「そうね」

「それで歳は幾つなんだい？」

「十八歳だよ」

ここで楽しそうに語るのであった。

「へえ、十八歳かい」

「そうだよ」

「八十歳の間違いだろ」

それを聞いて顔を少し横にやって言うパパゲーノだった。

「そりゃ」

「それでパパゲーノ」

今度はパパゲーノから聞いてきたのだった。

「あんたは」

「おいらは？」

「まだ聞きたいことがあるかい？」

「そうだな。あんたいい人はいるのかい？」

問うのはこのことにしたのだった。

「それで」

「勿論だとも」

「へえ、そうなのか」

パパゲーノはそれを聞いてまずは頷いた。

## 第二幕その八

「それでその人は若いのかい？」

「若いって？」

「あんだと同じ位かい？」

「いや、十歳は年上だよ」

パパゲーナは笑って言うてきた。ただしその顔はフードの奥で見えない。

「歳はね」

「ふうん、じゃあそれは誰なんだい？」

「あんだだよ」

笑ってこう言うてきた。

「あんだなんだよ、それは」

「おいらだつて？」

「そう、パパゲーノだよ」

こう彼に言うのである。

「あんだなんだよ」

「へっ!？」

ここまで聞いてやっとわかったのだった。

「おいらがかい？」

「そうだよ。私のいとしい人」

「決まったよ」

パパゲーノはここまで聞いてがくりと頭を垂れてだ。こう言った。

「試練を受けよう。もう喋らないぞ」

「ようこそ」

「試練を受けられているのですね」

ここでパパゲーノとパパゲーナのところにあの三人の少年達が来た。

「それは何より」

「それでなのですが」

少年達が話しているそこにタミーノも来た。少年達はここでタミーノとパパゲーノに対してあるものを差し出してきた。それは。

「この笛を」

「そして鐘を」

その二つをそれぞれ差し出してきたのである。

「どうぞ」

「ザラスト口様からです」

「そしてこれを」

「これもどうぞ」

今度はパンとワインであった。それを出してきたのだ。

「宜しく召し上がって下さい」

「そして今度御会いする時には」

「喜びが貴方達の勇気の酬いであるように」

そしてタミーノには。

「貴方には勇気を」

「目標は間近です」

タミーノはその言葉に静かに頷くだけだった。やはり喋らない。

「そしてパパゲーノ」

「貴方は黙るのです」

「いいですね」

彼には小言だった。そうしてだ。

パパゲーノは受け取ったそのパンを早速むしゃむしゃとやりだした。少年達はその間に何処かへと消えてしまっていた。

「さて、食べたら」

何時の間にかパパゲーノも消えている。二人だけである。

そして彼は食べながらだ。タミーノに声をかけるのだった。

「仰らないし。ああ、これは」

そのワインを飲みながらの言葉だった。

「美味しいや。かなりいいや」

「ここなのね」

そしてここにパミーナが出て来たのだった。

「ここにおられたのね。神々のお導きね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

タミーノは彼女を見ても何も言わない。

「あの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そのタミーノに声をかけるパミーナだった。

「どうして何も仰らないの？何かありましたの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

やはり喋らない。顔を背けさえしていた。

「何故。これは一体」

その彼の沈黙の前に困惑し狼狽するばかりだった。

「どういふことなの？」

そして悲しみも感じて言うのだった。

「愛の幸せが永遠に消えてしまったのね」

こう感じ取ったのだ。

「あの愛の喜びの時間は私の中にはもう帰って来ない。貴方の為のこの涙を貴方がもう愛の渴きを感じないのなら死の中に感じるしかないのね」

ここまで言っただけ泣きながら玄室から駆け去った。しかしタミーノはやはり一言も話さないのであった。そうしてである。

パパゲーノはである。ここで呟くのだった。

「いざとなれば黙っていられるんだ。料理人の旦那と酒倉番の旦那に乾杯だ」

上機嫌で今パンとワインを食べ終えていた。

「あれっ、行かれるんですか」

タミーノが今の玄室を後にするのを見ての言葉だ。

## 第二幕その九

「それじゃあおいらもか。やれやれ」

食べ終えたのでかなり上機嫌ではあった。

「行きますよ。それじゃあね」

こうして二人で部屋を出た。この時ピラミッドの玄室では僧侶達が神々を讃えていた。

「イシリスとオシリスよ」

「何という歓喜か」

「間も無く夜と昼が巡り合う」

「再び共にあるようになるのだ」

その夜と昼を讃える言葉からタミーノへの話になる。

「あの気高い若者は間も無く新しい命を感じ間も無く我々の聖なる務めにその身を捧げるだろう」

「彼の魂は雄雄しくその心は汚れない」

「間も無く彼は我等に相応しい人物になる」

「そうなるのだ」

ザラストロもいた。そして彼も言うのだった。

「彼は間も無く試練を乗り越える。そして」

「そして？」

「どうされるのですか？」

「パミーナを」

彼女の名前を出すのだった。

「娘をここに」

「わかりました。それでは」

「王女を」

そうしてであった。パミーナが連れて来られた。彼女はその目を真っ赤にさせていた。悲しみの中で父の前に連れて来られたのである。



「ここは」

「娘よ」

ザラストロは優しい顔で彼女に告げるのだった。

「彼は御前を待っているのだ」

「私をですか」

「そなたに最後の別れを告げる為に」

「最後の別れ……」

その言葉を聞いて顔を蒼白にさせるパミーナだった。

「そうだ。ここに来るのだ」

「ここに」

「そうだ、タミーノ」

こう言うのであった。そのタミーノも連れて来られた。パミーナは彼女を見てだ。そのうえで彼のところに駆け寄ろうとする。しかし。

「駄目だ、今は」

「えっ!？」

「まだ駄目だ」

右手を前に出してパミーナを拒むのだった。

「駄目なんだ、まだ」

「そんな、どうして」

パミーナは今の彼の言葉を聞いてだ。さらに青くなるのだった。

「もうこれで御会いできないのですか？」

「それは違う」

ザラストロが絶望の中に陥ろうとする彼女に告げた。

「そなた達はまた楽しく再会できるのだ」

「ですが」

パミーナは父の先程の言葉から本能的に悟っていた。

「貴方を恐ろしい試練が」

「神々が僕を護って下さる」

「その通りだ」

ザラストロもその通りだというのだ。

「だからだ」

「ですが貴方は」

それでもだつた。パミーナは心から彼を氣遣つて言つたのだつた。

「危機が」

「大丈夫だ」

しかしタミーノはそれでも決意を変えない。

「神々の御心が行われる。神々の合図が僕の掟だ」

「そうなのだ。だからだ」

「けれど」

その彼に尚も言うパミーナだつた。

「貴方が私が貴方を愛するのと同じ位私を愛して下さいなら」

「どうしると」

「そんな平気な顔をしないで下さい」

これが彼女の言葉だつた。

「ですから」

「それは信じて欲しい」

タミーノは切実な顔でそのパミーナに告げた。

「僕だつて同じ思いだ」

「では」

「君に永遠に忠実であり続けるだろう」

「それは信じるのだ」

またザラストロがパミーナに告げた。

「彼の心は本物なのだ」

「そうなのですか」

「だから今は耐えるのだ」

娘への言葉だ。

## 第二幕その十

「そなたへの試練だ」

「私への」

「わかつたな」

確かな、それと共に優しい声を娘に向けた。

「それで」

「はい」

そしてだった。パミーナも遂に頷いたのだった。

そうしてだ。タミーノはここで言った。

「では僕は」

「行かれるのですか？」

「試練を乗り越える」

パミーナに対して告げた。

「何があるうとも」

「行くがいい若者よ」

ザラストロは今度はタミーノに優しく確かな声をかけた。彼の後ろには僧侶達が並んで立ったままである。その中での言葉であった。

「再び」

「はい」

ザラストロのその言葉にこくりと頷いてみせた。

「今から」

「ではタミーノ」

パミーナは悲しみそのものの顔で彼に言った。

「これで」

「必ず帰って来る」

「それでは」

こうしてであった。二人は別れた。そのうえで二人は見詰め合っていた。であった。

「黄金の平安よ」

「また再び」

二人は別れタミーノも試練に向かう。パミーナはザラストロにまた何処かに導かれていく。彼女もまた試練の中にいるのだった。

そしてパパゲーノはだ。一人でピラミッドの中で騒いでいた。

「おいら一人かな。ねえタミーノさん」

周りを見回しながらタミーノを探している。

「いないんですか？おいら一人だけですか？」

「全く。困った奴だ」

その彼のところにだ。一人の僧侶が呆れた顔で出て来たのである。

「試練をする気がなかったのか」

「おいらはこのままじゃ餓え死にだ。こんなところにずっといたくないんですがね」

「餓え死にどころかだ」

僧侶はパパゲーノの前に来て言うのであった。

「御前は暗い大地の割れ目の中を永遠に彷徨い歩いて然るべきなのだぞ」

「そんなところにですか」

「そうだ。試練はいいのだな」

「そんなのどうでもいいですよ」

見事なまでの本音だった。

「そんなことは」

「情け深い神々が御前のその不心得を免じて下さる」

「それはどうも」

「その代わりにだ」

僧侶の言葉は厳しい。

「御前は神々に仕える者の貴い満足を味わうことは決まてない」

「だからそんなのはどうでもいいですよ」

本当にそんなことには興味のないパパゲーノだった。

「おいらは美味しい酒でもあれば」

「それでいいのか」

「ええ、それだけで」

いいというのである。

「構いませんよ」

「他にはいらないのか？」

「ええ、別に」

こう僧侶に答える。

「ないですよ」

「では望みを適えてやろう」

「そりゃどうも。しかし」

「しかし？」

「いえですね」

ここでさらに話すパパゲーノだった。何かを思い出した顔になつてである。

「お酒を貰えるとなつて嬉しいんですけど」

「どうしたのだ？」

「何かを思い出したんですよ」

腕を組んで首を傾げさせての言葉だった。

「何かをね」

「何かをか」

「何か欲しいものがあつたんですよ」

そうだというのだ。

## 第二幕その十一

「そうそう、それはですね」

「うむ、言ってみるのだ」

「一人の娘が女房ですかね」

「ここでやっと思ひ出したのである。」

「そんな優しい娘がいれば天にも昇る心地だよ。飲むものも食うものも全部美味くて王様だつて何のその」

「こう話していく。」

「賢者さながら世を楽しみ極楽浄土にいる気持ち」

「それだけでいいのか」

「可愛い娘の誰一人おいらを好きになつてくれないのか。一人位はいえもいいじゃないかな。さもなければおいらは悶え死ぬ」

「そうなるというのだ。」

「誰も愛してくれないならおいらは炎で悶え死ぬ。けれど優しい娘がいれば」

「わかった」

僧侶はここまで聞いて頷いた。

「ではその様にだ」

「本当ですか？」

「嘘は言わない」

「こうしてであつた。僧侶は静かに部屋を出てである、その代わりにだつた。」

「ここにいたのね」

「またあんたか」

「パパゲーノはあの老婆パパゲーナを見て思わず声をあげた。身体をこれでもかと伸ばしそのうえで心臓が飛び出そうな程口を開けている。」

「何で出て来たんだ!？」

「だから恋人につて」  
「有り難い幸せだ！」  
また飛び上がる彼だった。  
「だから何でこうなるんだよ！」  
「若しあんたが永遠に私に忠実でいると約束するなら」  
「それは？」  
「あんたの女房がどんなに優しくあんたを愛するか見せてあげるわ」  
「よ」  
「それはまた」  
パパゲーノはこのうえなく嫌悪感を露わにさせて言葉を返した。  
「有り難い幸せだ」  
「そう思うじゃろう」  
「うん、全然」  
全くというのだ。やはり素直である。  
「全くね」  
「じゃあ縁結びの印に手を」  
「遠慮させてもらうよ」  
如何にも嫌そうな顔での返答だった。  
「何があってもね」  
「躊躇つたらずつとここにいることになるよ」  
「それはもつと勘弁だよ」  
まさにあれも嫌、これも嫌だった。  
「本当に餓え死にじゃないか」  
「毎日食べるものはパンと水だけじゃよ」  
「餓え死にしないでくださいか!？」  
「お友達も恋人もなく」  
「パパゲーノの言葉は続く。」  
「世の中から何時までも見捨てられたまままで暮らさないといけないのよ」  
「そりゃ何て地獄なんだ」

「わかったわね」

「それなら婆さんでもいい」

彼もこう言うしかなかった。

「もうね。約束するよ」

「約束するんだね」

「そうだよ。もっと綺麗な娘が出て来るまでね」

「よし、誓うね」

「誓うよ」

心に思っていることはそのまま言ってしまった。

「是非ね」

「よし、それなら」

「何てこった」

パパゲーノはパパゲーナはその手を取ってから顔を背けて。悲嘆そのものの顔で言うのであった。

「何でこんなことになったんだろう」

しかし彼がパパゲーナを見ていない間である。彼女はそのフードを脱いでいた。するとそこには黄色い輝かんばかりの服を着て美しい黒髪と可愛らしい琥珀の瞳の女の子がいたのである。小柄で実に明るい感じの。

「ねえ」

「声色使うのかい？」

「使ってないわよ」

「こう彼に言ってみせたのである。」

「そんなのはね」

「じゃあ何で声が？」

「振り向けばわかるわ」

「楽しそうに言うのであった。」



## 第二幕その十二

「そうすればね」

「それだけでわかるっていうのかい」

「ええ、わかるわ」

「それでわかるのなら苦勞はしないよ」

「じゃあ振り向くのね」

「そうさせてもらうよ。じゃあ」

「こうして振り向くと。」

「今から………って」

「振り向いたわね」

「本当に十八歳だったんだ」

「そうよ。言わなかったかしら」

「聞いたけれど信じられるものか」

「こう返すパパゲーノだった。」

「こんなことって」

「それじゃあどうするの？」

「是非一緒に」

「パパゲーノは一転して能天気になった。」

「楽しくやろうか」

「よし、それならだ」

「こうしてであった。二人で楽しく手を取ってだ。」

「明るく踊りはじめた。しかしここでまた僧侶が出て来たのだ。」

「まだだ」

「まだってどうしたんですか？」

「そなたにはまだやってもらうことがある」

「こうパパゲーノに言うのである。」

「わかったな」

「わかったも何も」

「じゃあ私は？」

二人はそれを聞いてであった。少し呆然となった。だがパパゲーナは僧侶に対して明るい調子で言葉を返すのであった。

「私はこれで」

「えっ、ちよつと」

パパゲーナのその言葉を聞いてであった。パパゲーナは驚いてそのうえで話すのだった。

「それって」

「わかったな。そなたはここに来い」

「そんな、まだ何かあるんですか」

「何事にも手順がある」

パパゲーナに対して告げた言葉だった。

「いいな、それではだ」

「そんな、何てこつた」

しかしこのまま連れて行かれる。パパゲーナも部屋から去っておりに残ったのは誰もいなかった。部屋は暗闇の中に包まれていた。そして少年達はだ。ピラミッドのある部屋の中にいた。そこで誰かを待っているようだった。

「もうすぐ朝だね」

「うん、朝だ」

「もうすぐだよ」

まずはこう言い合うのだった。

「太陽が黄金のはじまりに燦然と輝く」

「間も無く迷信は消え失せて」

「間も無く聡明な人間が勝利を得る」

「そうして」

彼等の言葉は次々に出されていく。

「安らかな憩よ」

「天を降り再び人の胸に降り来たれ」

「その時この地上は一つの天国になり」

「死すべき者も神々に似たものとなる」  
「そして」

ここで少年の一人が言ってきた。

「パミーナは」

「そうだね。今とても落ち込んでいる」

「絶望の中に沈もうとしている」

「まずいな」

「その彼女が来たよ」

「うん、やっぱりここに来たね」

そのパミーナが虚ろな足取りで部屋に入って来た。そうして絶望した顔で言うのだった。

「もう何もかもが終わったのね」

「まずいな」

「うん、かなり」

「僕達にも気付いてないし」

少年達はそのパミーナを見ながら話す。

## 第二幕その十三

「ここは何とかしないと」

「さもないと大変なことになる」

「だから」

「私はこれで」

死という言葉が出ようとしていることを悟った。そうしてだった。三人はすぐに動いてだった。パミーナの周りを囲んだ。そしてそのうえで優しく声をかけるのだった。

「気を取り直して」

「落ち着いて下さい」

「どうかここは」

「けれど」

パミーナはその沈んだ顔で少年達に返す。

「そんなことをしても」

「いえ、死ぬことはありません」

「その必要はないんです」

「ですから思い止まって下さい」

「思い止まる」

パミーナもそれを聞いてふと言葉を止めた。

「けれど私は」

「いえ、それでもです」

「僕達の話聞いて下さい」

「どうかです」

「話を聞いても」

ここでだった。遂にパミーナは彼等に顔を向けた。そのうえで何とか気を取り直してそのうえで言葉を出したのだった。

「いえ、そうね」

「はい、そうです」

「王子のことですね」

「それですね」

「ええ」

少年達の言葉にこくりと頷く。

「どうして話し掛けてくれないのかしら」

「それは御答えできません」

「しかしあの方はです」

「貴女のことを心から想っています」

「だからなのです」

こつパミーナに話すのだった。

「ですからよければ」

「貴女は王子のところに行かれますか？」

「どうされますか？」

こつ尋ねるのだった。

「今から」

「如何でしょうか」

「そうですね」

その言葉を聞いてであった。パミーナも遂に言つたのだった。

「それでは」

「ではこちらに」

「今から参りましょう」

「愛に燃え立つ二つの心はです」

少年達は決意したパミーナにさらに話すのだった。

「人の力では引き離すことはできません」

「敵が骨を折ってみても無駄というもの」

「神々が御護り下さるのですから」

こつ言つてであった。パミーナを彼の場所に導くのだった。絶望は消えようとしていた。

奥に様々なものが渦巻いているのが見える入り口がある。その左右に二人の武装した兵士達が立っている。鎧兜に身を包みその手に

は槍と楯がある。その彼等が前に来たタミーノに対して言ったのだった。

「苦難に満たされたこの道を辿り行く者」

「その者は火、水、風、土により清められる」

「そなたが死の恐怖を克服できれば」

「この地上から天上に舞い上がるのだ」

「そなたは光に照らされて」

「イージスの秘儀に一身を捧げることができるようになるのだ」

こうタミーノに告げる。すると彼はそれに応えて言うのだった。

「死は怖れない、それに行動して徳の道を歩み続けます」

「それがそなたの心だな」

「間違いないな」

「はい」

まさにその通りだというのだった。

「どうかその先に進ませて下さい。進んで危険な中に入りましょう」

「よし、わかった」

「それではだ」

兵士達は彼を行かせようとする。しかしだった。

ここにパミーナが来てだった。そして懇願してきた。

「お待ち下さい！」

「パミーナ!？」

「ええ、私よ」

パミーナは驚くタミーノの傍に来て答えた。

## 第二幕その十四

「私が」

「けれど君は」

「いや、いいのだ」

「これでいいのだ」

しかし兵士達はこうタミーノに言うのだった。

「ザラスト口様はこうなるとわかっておられた」

「二人で乗り越えてこそなのだ」

「二人で」

「そうだ。運命が導いている」

「例え死が定められているにしても」

こう言つてであつた。二人で行くことを許すのだった。そうして  
だつた。

タミーノはパミーナを見た。そうして彼女に声をかけるのだった。

「君と一緒に行くことができる」

「はい、二人で」

「例え何があつても行こう」

「二人で」

こうしてであつた。二人で向かおうというのだ。

兵士達もそれを見てだ。静かに言う。

「行くがいい」

「はい、パミーナ」

「ええ、タミーノ」

二人で見詰め合つていた。

「二人であの中に」

「進もう」

「私は貴方の手を取つて」

既に自分の両手で彼のその右手を強く握り締めていた。

「そうして」

「そうして?」

「愛の導きに従って」

そうするといふのである。

「先に進みましょう。あらゆる苦難は」

「苦難は?」

「その魔笛を吹いて下さい」

「この笛を」

「そう、吹いて下さい」

そうするといふといふのである。

「その笛が私達を護ってくれます」

「そう。それなら」

「その魔笛はお父様が作られたものです」

「ザラスト口様が」

「そうです」

まさにそうだといふのだ。

「ある魔法の時間に雷光と雷鳴が鳴り響く嵐の中で千年経ったオ」

ク樹の根を刻んでそのうえで作ったものなのです」

「それがこの魔笛」

「その通りです。ではその魔笛を吹いて」

「うん」

パミーナのその言葉にこくりと頷く。

「行こう」

「ええ、それでは」

「僕達はこの魔笛の力を頼りに進んで死の暗い中を通り抜けよう」

「行くがいい」

兵士達も二人に告げる。

「今からだ」

「そなた達の先に」

こうして二人は中に入った。そこでは火も水も大地も風も荒れ狂



っている。しかし魔笛を吹けばであった。

「炎の灼熱の中も」

「あらゆる危険も」

「溢れる水の中も」

揺れ動く大地も荒れ狂う風もであった。全てがタミーノが吹いたその魔笛の音の前に消えていく。全ては静寂に覆われたのだった。

「これで鎮められ」

「僕達は今から」

「神々の幸福の中に」

「彼等は手に入れた」

ザラストロはそれを見て言うのだった。

「後はだ」

「はい、他の者達もですね」

「手に入れるのですね」

「その通りだ」

まさにそうだというのだ。

「幸福と。そして」

「昼と夜が再び一つになる」

「その時もまた」

「来るのだ」

こう話してだった。彼等はそれぞれ話していく。その目には未来が見えていた。

## 第二幕その十五

そしてだ。僧侶にある部屋に連れて来られたパパゲーノは一人でどうしていいかわからなくなってきた。パパゲーノがいなくなつてだ。

「折角一緒になれると思つていたのに何なんだ？」

こうぼやきながらうろろとしている。

「パパゲーノが消えておいらは不幸の中」

己のことをしきりに嘆くのだつた。

「お喋りはしたさ。けれどあの娘がいないと」

やはりパパゲーノのことを話す。

「どうすればいいってんだ。せつかく見つけたいとおしい相手なのに」

こう言つてどうしていいのかわからず頭を抱えてその玄室の中をうろろろとしていた。そうしてそのうえでだ。何故か部屋の中にあつたロープを手にとつてだ。それで首吊りを作つたのであつた。

「さて、と」

それを作つてから言つ。

「いんちきな世の中はおいらにだけ厳しい。可愛いパパゲーノも何処かに行つておいらは一人だ」

その首吊りを見ながらの言葉だ。

「けれどあの娘が来てくれたら考えてもいいんだけどな。おおい」

ここで誰もいないのに周りに声をかける。

「誰かいないのか？」

こう問うのだつた。

「誰かいないか？止めるなら今のうちだぞ」

しかし返答はない。

「いないのか？」

もう一度問うた。

「もう一回尋ねるぞ。いないのか？」  
やはり返事はない。当然ではある。  
「一、二、三で数えて本当に返事がなかったら」  
わざわざ勿体までつける。  
「死ぬからな。いいな」  
やはり返事はない。ここでやっと諦めるパパゲーノだった。  
「わかった。もういい」  
そのまま首吊りに向かう。しかしであった。  
「待って下さい」  
「何をするかと思えば」  
「落ちて着いて」  
少年達が来た。そうしてすぐに彼を止めるのだった。  
「人生は一度だけですよ」  
「それでそんなことをしてもです」  
「何もなりはしません」  
「けれどだね」  
パパゲーノは首吊りを取り払いながら彼等に述べた。  
「おいらはだね」  
「わかっていきます。パパゲーナですね」  
「彼女ですね」  
「そうだよ。あの娘はどうやったら戻って来るんだい？」  
「その鐘を鳴らせばいいのです」  
少年の一人が答えてきた。  
「それを鳴らせばです」  
「鐘を使えばいいのか」  
「そうです」  
「よし、わかった」  
それを聞いて確かな顔で頷くパパゲーノだった。  
「それなら鳴らすよ」  
「是非共」

「そうして下さい」

「よし、それなら」

パパゲーノは早速鐘を鳴らした。

「鈴の音よ。響き渡り可愛い恋人を連れて来てくれ」

「さあ、パパゲーノ」

「周りを見て」

「ほら、周りを」

「周りを？」

するとだった。パパゲーナが来ていた。その彼女が笑顔でパパゲーノに告げてきた。

「パパパ」

「パパパ」

それに合わせてパパゲーノも言う。

「パパパ」

「パパパ」

そしてパパゲーノが出した言葉は。

「パパゲーナ！」

「パパゲーノ！」

パパゲーナも笑顔で彼の名前を呼んできた。

「やっと会えたよ」

「そうね、やっとね」

「長かったけれどこれで」

「私達は会えたのよ」

「それじゃあ」

パパゲーノは満面の笑顔で彼女に言うてきた。

## 第二幕その十六

「パパゲーナはおいらの恋人だね？」

「そうよ」

パパゲーナは満面の笑みで彼の言葉に応える。

「その通りよ」

「そうか、それなら」

「私達はずっと一緒よ」

「神様がおいら達の愛を祝ってくれて」

パパゲーナはもう上機嫌だった。

「私達に小さい子供達を授けられれたら」

「そうだよな、それだけで」

「どんなに幸せか」

「はじめは」

まず言ったのはパパゲーナだった。

「小さなパパゲーノ」

「次は小さなパパゲーナ」

「そしてまた小さなパパゲーノ」

「また小さなパパゲーナ」

二人で手を取り合って笑顔で回りながら話す。

「パパゲーノ！」

「パパゲーナ！」

「パパゲーノ！」

「パパゲーナ！」

二人で話をしていく。すると二人の周りに大勢の彼等によく似た子供達が出て来てであった。二人を取り囲み一緒に踊りはじめた。

「家族で幸せに暮らせることも」

「この世で最も楽しいことの一つだから」

皆で笑顔で話していく。二人も明るい喜びを得たのだった。

そして最後にだ。モノスタトスの先導で夜の女王と侍女達がピラミッドの奥に向かっていった。そこであれこれ話をしていった。

「遂にあの男にやり返せる」

女王はその中で言うのだった。

「忌々しい。昼の世界などというものは」

「それでなのですが」

案内をするモノスタトスがここで女王に言う。

「成功したらお嬢さんは俺に」

「わかっていきます。仕方ありません」

女王は少し慥然としながら述べた。

「それは」

「わかりました。それじゃあ」

「しかし何か」

「光が迫る様な」

「その感じが」

女王の後ろにいる侍女達は不吉なものを感じる顔であった。

「します」

「女王様、ここは御気をつけて」

「どうか」

「わかっていきます。ザラストロめ」

扉の前に出た。女王はいよいよ意を決して言う。

「今度こそは」

「そう、御前達もだ」

ここであった。ザラストロの声がしたのだった。

「昼を知るのだ」

「！？これは」

「この光は」

女王達が驚いたその時にだった。太陽の光が彼等を照らす。その光を受けた女王達は最初は啞然となっていたがすぐにだ。光の中で少しずつ恍惚とした顔になっていった。

そしてその顔でだ。それぞれ言うのであった。

「これが昼の世界……」

「昼の世界が持っているもの」

「これが」

「昼だけでも駄目で夜だけでも駄目だ」

ザラストロが出て来て言う。そこにはタミーノとパミーナもいればパパゲーノとパパゲーナ、そして子供達もいた。僧侶達に兵士達、それに民衆もだ。誰もが集まっていた。

ザラストロはその中で妻達に対して静かに告げた。

「そなたも昼を知った。これからはだ」

「また一緒に」

「そうだ。どうだ？」

「貴方が夜を知り私が昼を知る」

女王も自分の前に来た彼を見詰めながら言う。

「世界はそうあるべきなのね」

「その通りだ。それではだ」

「ええ、また一緒に」

「モノスタトスよ」

ザラストロは彼にも声をかけた。侍女達は静かに女王の後ろに控えた。

「そなたにもやがて相応しい相手が見つかる」

「だといいますがね」

「月も一人では寂しいものだ」

「そしてこつも言うのであった。」

「そして一人では何にもならないからだ」

「それでは」

「悔い改め心を落ち着かせるのだ」

穏やかな声で彼に告げた。

「わかつたな」

「はい、それでは」

「皆の者、讃えよう」

全てが終わったと見たザラストロは一同を見回して言う。部屋の  
中は太陽の輝きに照らされている。

「昼と夜が一つになったことを」

「はい、そして神々に」

「深く感謝を」

タミーノとパミーナも言う。

「勇気ある者達が勝利を収め」

「その報いとして美と叡智が永遠の冠を頂かせる」

「そしてそれをつかさどるのは愛」

ザラストロも厳かに言った。

「愛が全てを幸福にするのだ」

皆このことを心から感じ恍惚となっていた。今二つの愛が成就し  
昼と夜は元に戻った。誰もがこのことを心から喜んでいた。

魔笛 完

2010・2・25



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1070p/>

---

魔笛

2011年4月28日01時10分発行